「冥府」 参考資料一覧　　第130回 福永武彦研究会 2011.9.25配布資料
＊要旨は資料作成者の主観によるものであり、著者が意図したところを反映しているかどうかは不明です。

1. 福永自身による言及など

No.	タイトル	著者	書名（出版社）	初出年/月	ページ数	要旨
0	「冥府」初出と書誌	―	福永武彦全集 第3巻 附録他より（新潮社）	―	1	・初出：「群像」昭和29年（1954）4月号及び7月号 ・単行 1. 第二短篇集「冥府」初版に収む。1954年8月講談社。四六判・角背厚紙装。「ノオト」1954年7月、著者自装、帯文：石川淳 ＊「冥府」「氷中花」「時計」「遠方のパトス」「河」所収 2. 「冥府」・「深淵」初版。昭和31（1956）年3月大日本雄弁会講談社刊。「ミリオン・ブックス」の一巻。新書判、紙装。装丁：駒井哲郎、解説：寺田透。 3. 「夜の三部作」初版。昭和44年（1969）12月講談社刊。四六判、布装、函入。装丁：著者、序文：著者。 4. 「夜の三部作」限定版。昭和45年（1970）8月講談社刊。A5変型、総皮装、布装帙入。限定500部、番号入。全冊著者署名。内容は2に同じ。
1	「冥府」初版ノオト	福永武彦	「冥府」初版（1954年8月） 福永武彦全集（新潮社）第3巻 附録に所収	1954/08	3 （全集）	「冥府」は格別奇を衒（てら）うつもりでこのような題材を選んだのではない。僕にとって極めて自然な発想だった。暗黒意識という考えは、毎日天井を向いて寝ていた間に思い浮かべたことの一つだが、これはもっと別の形ででも書いてみたいと思っている。戦後のヨーロッパの文学や映画などに、死後の世界を扱ったものが多いが、僕はそれらと関連を持たせてこれを書いたのでも、またそれらを模倣したわけでもない。ただこの作品を書く動機に、友人加藤道夫の自ら選んだ死が、強く作用したことは否めない。それは僕自身の切実な問題と結び合されている。 この作品集のどれもが、死を主題にしていることに僕は漸く気づき、いま僕は、暗然とした気持で僕の病床生活を振り返っている。現実を見る眼はさまざまある。しかし僕は、その間に、現実を死者の眼から見ることを覚えた。その視点は現実を魔術的に変貌させ、見えるものばかりでなく見えないものをも見させることが出来た。従って僕は、一般のリアリズムとまったく関係のないところで、今後の仕事を続けたいと思う。この作品集が僅かに五篇をしか集録していないのは、僕が病床にあったためというより、現実を見る視点をさだめるために、僕が長い時間模索を続けていたからに他ならない。それにしても僕が病床にあって学び得た事柄がいかに貧しかったかを思えば、今、これらの時間の空費されたことが嘆かわしい。（引用）
2	「夜の時間」初版附記	福永武彦	「夜の時間」初版 福永武彦全集（新潮社）第3巻 附録に所収	1955/06	1 （全集）	この作品は、昨年度に僕の書いた「冥府」及び「深淵」と共に、「夜の三部作」と呼ばれるべき中篇のシリイズを形成するものである。それぞれに独立した物語だが、ただいずれも暗黒意識を主題にして、それを三つの違った面から取り扱っている点にのみ、共通点がある筈だ。
3	「夜の三部作」初版序文	福永武彦	「夜の三部作」初版 福永武彦全集（新潮社）第3巻 附録に所収	1969/10	3 （全集）	私は「死の島」に関連した主題をあれこれと考えているうちに「冥府」の主題に行き当たった。人間を内面から動かしている眼に見えない悪意のようなもの、私は作中人物の口を借りてそれを暗黒意識と呼んだが、そのような無意識それ自体を幻覚化して抽象的な形で書いてみたいと思った。その頃の私のノオトには「死の島」の一つのvriationと断ってあるように、「冥府」は私がそこで暮した死の島の一風景で、私を捉えて離さなかった死の強迫観念と、それから逃れるための願望としての生の燃焼とを、同時に含んでいた。その年の終りに加藤道夫が自殺したことは、恐らく作品執筆の最後の一押しになったように思う。私は彼の死に痛恨と羨望の入り混じった一種の感情を抱き、それが作中の「自殺者」に対して私の筆がやや苛酷になった原因かもしれない。この小説は昭和29年の「群像」4月号と7月号とに分載されたが、私は当時批評家に言われたようにカフカやサルトルを下敷に使った覚えはまったくない。（引用）
4	福永武彦全小説 第3巻 序	福永武彦	福永武彦全小説 第3巻 福永武彦全集（新潮社）第3巻に所収	1973/11	3 （全集）	療養所にいた頃に私が最も熱心に勉強したのは精神病理学である。（略）私はミンコフスキイの「精神分裂病」とか村上仁の「精神分裂病の心理」などという本を丁寧に読み、分らないところがあれば岡田さんに質問したりした。（略） 「夜の三部作」については、その都度単行本の後記で説明したから付録を参照してほしいが、これらも精神病理学に基いた作品ということが出来ようか。療養所を出た年に、暮までかかって「草の花」を書き終えると、翌昭和二十九年の一月から二月にかけて「冥府」の前半を書いた。「草の花」が主人公に作者自身のしっぽをつけていたのに対して、ここでは主人公から独立し、謂わば主人公の住む世界の雰囲気が作者の心的状態を抽象的な模様として写し取っているような構図を取った。五月に「冥府」後半、八月から九月にかけて「深淵」、翌昭和三十年の三月から六月にかけて「夜の時間」を書いたが、登場人物たちは次第に作者の精神の或る部分の拡大した図形を描くに至ったように見える。それは私が療養所にいた間に「物を思」ったその「物」が、絶望的に暗かったせいであろう。（引用）

No.	タイトル	著者	書名（出版社）	初出年/月	ページ数	要旨
5	「冥府」エピグラフ	福永武彦	ギリシア詞華集			死の道の行くところ、よしアテナイからであらうとも、 メロエからであらうとも、冥府への降（くだ）りはただ一筋。 故郷（ふるさと）をよそに死んだ者をも嘆き悲しむなかれ、 死の国に吹きよせる風はいづこの空からも吹く。
6	ボードレールの世界	福永武彦		1947/08		この題名『冥府』こそは、ボードレールの一生を賭して成った詩集の、最初の題名であると共に、それを最も明かに特徴づけるものだ。この「冥府」とは何だろうか。神学的解釈によれば、「冥府」とは、死後、人間が行くべき第四の場所或は第四の状態を意味する。それはカトリック教会によって認められず、教理問答に記載されていない、天国と煉獄と地獄の外にあるもの、即ち洗礼を受けずに死んだ子どもたち、善行の異教徒たちが行くべき場所である。そこを司る者は神でも悪魔でもない。そこに在るものは悦びでもなく苦しみでもない。（略）ボードレール自身が次のように歌っている。「私はお前の憐みを願う、お前、愛するただ一人の者よ、私の心が沈み果てたこの暗い深淵の底から。そこには鉛色の地平線を持つ陰鬱な世界、夜の中をただ恐怖と冒瀆とは泳ぐ・・・・・。」この世界こそ、彼が求めて宿とした先天的な住所であり、後に彼の魂がしばしば地獄の中に降り、煉獄の聖なる火に焼かれ、また時たま天国の救いの中に高く飛翔することはあっても、常に疲れ倦んで帰るところだった。そしてこの**冥府**での精神生活を最も端的にしるしづけるもの、それはボードレールが自ら選択し、これに独創に近い意味を与えた言葉、**憂愁**に他ならない。（引用）
7	病者の心	福永武彦	「保険同人」1952年7月号 随筆集「別れの歌」（1969）所収	1952/05		心が絶望に塗りつぶされ、嘗て生きたように自分はもう二度と生きられないだろうと考える時に、忽然と、死は彼の胎内にある。（略）一度精神の死を魂に刻み込まれた者には、真の人間としての回復はたやすくはない。死の傷痕は、以後、彼の一切の思考を支配するだろう。（略） 肉体の点に関しては、彼は医師の手にすべてを委ねていればいい、それは大舟に乗ったようなものだろう。が、精神に関しては・・・・・・。そこに問題がある。精神に関しては、彼は何ひとつ頼るものはない。彼の精神は、ただ彼一人の責任である。ドラマはそこから始まる。 死はその場合、病者の一切の思考と行動とに影を下す暗黒の意識である。
8	詩人としてのボードレール	福永武彦	「ボードレール全集」第一巻 人文書院刊	1963/03		ボードレールの『冥府』は社会主義的と言ったものでは勿論ないが、しかし彼の内部の神学的、形而上学的状態を示していることは明かである。（略）それは一つの魂の状態である。そしてまた、詩人によって眺められた**現世**である。ここで問題なのはそれが地獄、即ち死後の世界を意味するのではなく、死を内に孕んでいる現世、人がそこに生き、理想に憧れながらも泥にまみれて暮して行かなければならない、この有限の時間の範囲を指していることである。「死」は**慰めるもの**であり待ち望むものではあるが、詩人はそのような死に向って脱出することは出来ない。況や天上の世界へと飛び立つことは出来る筈もない。「ただ愛しあう二人が死んだ場合をのぞいて。）魂は「一つの墓場」であり、その魂が住むのは「暗愁の世界」である。そこでは魂と世界とが憂愁によって一つになる。（引用）
9	対談・小説の発想と定着	福永武彦 菅野昭正	国文学　1972年11月 対談集「小説の愉しみ」 （1981）所収	1972/11		福永　そうですね、いちばん最初の発想というものは、ぼくは、なんだか変なときに、たとえば風景なら風景を見ているとか、なにか人の言ったつまらない言葉とか、そういうものが発想になることがずいぶんあるわけです。たとえば、「冥府」のなかに、小さな子どもがふたり遊んでいて、「ゲンムシ取りに行こうか」といって、「ゲンムシってちびっこい虫でね」なんて説明する。そういうのを実際に聞いたことがあるわけですね。そうすると、そういうのを聞いたことが、なんだか急に、一種のリリカルなものとしてぼくのなかで広がっていって・・・・・、そういう発想が多いわけです。 菅野　無意識的な記憶がうかんで、発想の端緒がつくられるわけですね。（引用）
10	詩「人はみな幻想（シメール）を」	ボードレール 福永武彦 訳	散文詩『パリの憂愁」の1篇	1869		大きな空は鉛色に垂れ、道もなく、芝草もなく、薊（あざみ）も蕁麻（いらくさ）も生えていない埃だらけの大平原の中を、首うなだれて歩いて行く多くの人々に出会った。（略） 私は行人の一人を呼びとめると、そうやって一体何所へ行くつもりなのかと尋ねてみた。その男は、自分も、また他の連中も、行先のことは何も知らぬ、ただ前進しようという打ち克ちがたい欲求に絶えず駆り立てられている以上、確かに何所へかは行きつつあるのだろうと答えた。（略） 疲れ切った、しかし真剣などの顔にも、何等絶望の影をしるしづけているものはなかった。大空の憂愁に充ちた天蓋の下で、この空に劣らず荒寥寂漠とした大地の埃に足をまみらせながら、彼等は諦め切った面持でこの道を歩いて行った。永久に希望を持つべく運命に罰せられた者の諦めを持って。（引用）

2 単行本

No.	タイトル	著者	書名（出版社）	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
1	「夜の三部作」	首藤基澄	福永武彦の世界（審美社） 第4章	1974/05	35 （第2章）	福永はまぎれもなく現代の「病者の心」を描いているのである。行動を奪われた病者は、ふつう過去の「自分の生に立ち会うこと」と「他人の生に立ち会うこと」しか許されていない。福永はそうした無残な生を強いられた者の、悲惨な現実にアプローチしているのである。それも『草の花』におけるように自我を極限にまで拡大した理想像としてではなく、「悪意」において。（略） 「冥府」においては超越者が介在していない。福永は超越者に代わるものとして「運命の悪意」を考えているが、作中人物たちは、それにひたすら耐え、自殺者さえもが新生を熱望するという構図によって、現実の生がかけがえのない重みを持って来ているのである。（略） 現実の、「惨めで、下らなく、人生の本質からは遠い」生に傷つきながら、その意義を認識し、新たな生に賭けようとする時、その可能性が完全に塞がれているという悪意の人生観に立った堀さげが、われわれの愚劣な人生に激しく問いかけているといってもいい。福永は『風土』で提出した「死者の眼」を、ここで見事に作品化しているのである。それはもちろん挫折ムードの作品ではなく、「傷痕を嘗めて、未来の死を今日に於て生きる」（「病者の心」）という福永の、事実ではないが、しかし、ある面からすればその内面の問題を丸出しにしたような、敗者の痛憤で裏うちした現実批判の書であると私は思う。（引用）
2	福永武彦論	西岡亜紀	福永武彦論 「純粋記憶」の生成とﾎﾞｰﾄﾞﾚｰﾙ	2008/10		本論考の主旨は、資料5-6と概ね共通している。 「死を内に孕んだ現世」としてのボードレールの＜冥府＞に「死者の眼」という視点を通して映し出された自らの現実を重ねつつ、そういう世界のイメージを作品において表象するに当たって、ボードレールの＜憂愁＞のイメージを意識していたというのが、小説「冥府」におけるボードレールとの接点の方向性と言えよう。（略） ボードレールの詩的世界では、重苦しい現実からの脱出あるいは鏡として幼年時代が志向されると、福永は読み取る。この構図は、「冥府」という小説における「暗黒意識」と幼年の記憶との構図に重なるものと思われる。重苦しい現実や「暗黒意識」は現実のほとんどを占め、現実は絶望的であるが、しかし、そういう「闇」があるからこそ、「人の嘗て経験し得た最も純粋な時間、―幼年時代の追憶」が意味を持ってくる。また、こうした時間を見出すことによって、わずかな光明が射し込むという方向性がある。（略） このようにして「暗黒意識」の側から「幼年」の意味を見極め、闇に抗う光という輪郭で「冥府」という小説のなかに幼年の記憶を表現として定着していったことは、後に小説『幼年』において、記憶の闇が「純粋記憶」と不可分のものとして描かれるための背景を、思想的にも方法的にも用意したと言えるだろう。（引用）

3. 文芸関連雑誌

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
1	福永武彦における＜暗黒意識＞	清水徹	国文学 17巻14号 1972年11月号 特集 福永武彦	1972/11	8	内部に孕まれた＜死＞、孤独・挫折・絶望の源泉、錯乱・狂気の心的な場の三者を福永は＜暗黒意識＞の名の下に統一的に把握する。類同物をたどるようにて＜暗黒意識＞の範囲をひろげてゆくことによって、かれは、生を生きるときの心的状態をいわば逆光の下に浮かび上らせるような装置を手に入れるのである。言いかえれば、かれは、＜暗黒意識＞を裏箔とする鏡を磨き上げ、これに生の姿を映しだすことによって小説を創造してゆくのだ。 『冥府』において＜暗黒意識＞の観念が定立されたことの意義は大きい。たとえば『風土』は歴史的な枠組みを取りこんだ芸術家小説という堂々たるロマンの構図を示しながら、芸術家の孤独、日本と西欧との芸術的風土の差異、死の想念、愛の挫折などの内部主題を支え相互にかみあわせる共通の基盤が薄弱の感を免れなかったし、『草の花』の場合も、そこにおける愛と孤独の主題は抒情的感傷性にあまりに染められていた。＜暗黒意識＞の観念の定立は、そうした福永武彦の恒常的主題を内面化された＜死＞の深みへと根づかせ、生の根源にかかわる作中人物たちの姿を浮かび上らせるのに大いにあずかって力あるのである。（引用）
2	福永武彦における冥府・深淵の意識	白川正芳	解釈と鑑賞 39巻2号 1974年2月号 特集 堀辰雄と福永武彦	1974/02	3	福永武彦は、死後の世界を書くことによって、冥府から人間の意識構造を探求しようとした。小説「冥府」のなかで、教授が述べる「発見」のなかにその着想が述べられていて興味深いものがある。（略） 作者の自意識の暗闇がここにある論理で整理されて提出されている。（略） 福永氏における冥府・深淵の設定は、自意識の暗闇を探り、ある認識に到達するための方法であったということができるだろう。その小説がどこか＜閉じられている＞のは、氏が、失われたものの探求を根底でうまずに続け、＜私＞をトータルで認識したいとの欲求をもっている作家であることとも深いかかわりをもっているであろう。（引用）

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
3	福永武彦の文体	粟津則雄	国文学　25巻9号　1980年7月号 特集　福永武彦	1980/07	6	『冥府』には、福永武彦という作家の資質が、主題においても文体においても、きわめて凝縮されたかたちで立ち現われているようだ。（略） この文体に類縁を求めれば、たぶんボードレールの文体がもっとも近いだろう。たとえば『パリの憂愁』のなかの散文詩『人はみな幻想（シメール）を』などを読むと、そこには、単なる表面的類似にとどまらぬ血縁的なつながりのようなものが感じられる。（略） 福永武彦の、きわめて分析的で抽象的でありながら、対象へほとんど官能的と言いたいほどの危うい接近を続けているような文体は、まさしくこの「冥府」という主題そのものに即していたものであると言える。 だが、「冥府」という作品を読んで私が感じるのは、この文体が、この主題に即したものであるにしても、必要上たまたま採用した一回限りのものではなく、この作者の意識の構造そのもののあらわれであるということだ。そういう意味では、「冥府」という主題がこのような文体を求めただけではなく、このような文体が体現する作者の精神のありようそのものが、「冥府」という主題を求めたとも言いうるだろう。「冥府」とは、作者の幻想がたまたま生み出した或る特殊な世界ではなく、実は福永武彦という作家が終始とどまり続けた場にほかならないのである。「廃市」「海市」「忘却の河」「死の島」といった彼の作品名を思い起してみれば、これらがいずれも「冥府」のさまざまなヴァリエーションであることがわかる。（引用）
4	夜の三部作	栗坪良樹	解釈と鑑賞　47巻10号 1982年9月号 特集　福永武彦	1982/09	8	「冥府」に読む限りの福永武彦の精神は、生の諦観と生の衝動との間に行きつ戻りつしながら、その時点における自身の精神の姿を明視し、然るべく決着をつけるように努めている。それはまさに自己の精神の問題として努力しているとしか言いようがないものであるが故に、小説の形はアフォリズムの形を拡大し、ところどころにドラマを点綴（てんてい）したようにしか見えていない。勢い読者は、筆者の精神のかけらを拾い集める日雇い人夫の如き役割を演じさせられ、徒労感のうちに幕は一方的に下されてしまう。（引用）

4. 新聞、文庫/全集 解説他

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
1	創作合評「冥府」	青野季吉 川上徹太郎 中村真一郎	「群像」1954年5月号 日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」（1978）所収	1954/05	3 再録時	河上：観念が少し生過ぎる。もう少し幻想の世界でこの観念を中間色でぼやかして、こういう世界が描けたら、読んでいてもっと楽しかったのではないか。 中村：作者はある程度の長さの小説の書き出しだけでやめたのではないか。これだけで完結したものと見ると、人物に肉付けが足りない。これで完結していないとすると、かなりうまく行っているような気がした。観念が直截であるために、幻想的作品の持つ曖昧さから救われた。 青野：「冥府」は設定で、諷刺というような意味でなく現代を抽象的に描いていると思う。（要旨）
2	「冥府」・「深淵」解説	寺田透	「冥府・深淵」初版の解説文 1956年3月大日本雄弁会講談社刊 「ミリオン・ブックス」の一巻 日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」（1978）所収	1956/03	2 再録時	「深淵」の「己」の生き方の対偶は、あの「冥府」を形作る。死が直ちに新しい生への門出であるような生とはどんなものでなければならないか。そうでないような生は、生きながら冥府にあることではないか。―と言えば、この問いが直ちに「夜の時間」の奥村「哲学」に連ることが分るだろう。 著者はこの三作を「暗黒意識を主題にした三部作」と呼ぶのだが、僕にしてみれば、それはより適切に人間の意志や感情ばかりでなく、思考や行為まで支配するその内部の意識されざりしもの、それを己に即し、また作中人物に即して造形しようとした三部作と改称されるべきものだという風に思われる。（引用）
3	福永芸術の冥府 ― 作家の表象 ―	奥野健男	サンケイ新聞　1975年12月15日号 日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」（1978）所収	1975/12	2 再録時	「冥府」は死後の世界の物語、いや死んだ人間の目を通しての現実世界の再構成の小説である。石川淳が、福永のことを「向うの世界から来た人間」と評していたが、まさに彼は夜と病気の思考の極限に、あの世を体験し、あの世からこの世を眺める目を獲得した文学者なのである。 「冥府」「深淵」「夜の時間」の"夜の三部作"は昼のにぎやかな世界に背を向けた深夜ひとり目ざめ、昼間の光では見えない深い影やひだを極限まで追いつめた狂気や死に向かうネガの世界である。（引用）

5. 大学研究紀要、その他研究録

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
1	福永武彦の暗黒意識について ― 「冥府」「深淵」を中心に―	首藤基澄	国語国文研究と教育　第1巻	1973/01	5	福永武彦の世界（審美社，'74）第4章「夜の三部作」の「冥府」の部分と同じ →資料2-1参照
2	冥府の中の福永武彦―ボードレール体験からのエスキス	山田兼士	昭和文学研究　第31巻	1995/07	11	「冥府」の書き出し、"僕は既に死んだ人間だ"は、前作「塔」の末尾「それは僕の死だった」を直接引き継いでいる。（略） 「作品は常に遺書の代りだった」という福永が「僕のとって極めて自然な発想」であった「冥府」の主題にようやくとりかかるのは、昭和29年1月のことである。「僕の死」以後を描くこの奇妙な作品世界は、作者が自ら述べるように、「現実を死者の眼から」描き出したものである。この一見不可能とも思われる視点の設定は、やはりボードレールの＜世界＞から福永が抽出してきたものと想像される。 「冥府」の主人公がさまよう街は、明らかにボードレールが＜憂愁＞を主題とする作品群に描き出した「憂愁に充ちた天蓋の下」の風景に一致している。（略） 福永は、ボードレールが抽出し探求した＜憂愁＞の情景の中に、己自身を投げ入れることによって、自ら＜憂愁＞そのものと化すことを企てたのである。勿論、ここで言う「己自身」とは、正確な意味で作者自身ではない。作者の意識の一部としての「己自身」であり、また作者が意識的に生み出した一つの分身のことである。（略）福永はここで初めて「僕」を「他者」の位相で描く方法を確立した。（略）福永の自己意識はボードレールの〈憂愁の精神＞から出発しながら、独自の展開によって＜憂愁＞そのものを演じる数々の人物像へと化身していったと言えよう。（引用）
3	福永武彦における志向と「暗黒意識」 ― 「冥府』から『幼年』の「闇」の実体に迫る	鳥居真知子	甲南大学紀要（文学編）　第9巻	1996/03	16	「冥府」の主題は、福永を脅し続ける死の意識である「暗黒意識」と、そこからの彼の脱出願望なのである。その願望は作中で、主人公が希求するものとして表されている。（略） 「僕」は作中で「希望が即ち存在なのだ」と語る。それは福永自身が、7年間に及ぶ絶望的な闘病生活を経て語った「死の強迫観念と、それから逃れるための願望としての生の燃焼」という言葉とも通じる。つまり、「僕」の希望の対象は、生と死を越えた踊子との世界である。そこでは生と死へのこだわりがない。その世界への志向の心を持ち続けることこそ、「僕」にとっても福永にとっても「暗黒意識」から逃れ、自己存在を支えていく唯一の道であったのだろう。 それは「人々が無意識に持った生の観念を、ぎりぎりに意識的に見ること」によって見出した福永の生き方である。主人公「僕」にたいする福永の苛酷なまでの厳しい眼は、彼自身に向けられたものと言えるのである。（引用）
4	「冥府」再考 －幻想世界の構造を「未来都市」と比較する	高野泰宏	福永武彦研究　2001年　第6号 福永武彦研究会	2001/8	17	本論考は、「未来都市」と「冥府」という幻想世界を描いた二つの作品の共通項として、人間の意志を超えた世界律を抽出し、その違いを論じている。 「未来都市」では＜神性放射＞が世界律を規定し、「冥府」のそれは＜暗黒意識＞である。福永は"自殺者"に、「超越的な意志は存在しない」と語らせているが、裁判が開かれ、僕に"何か"が、「却下」と叫ばせたりすることから、「冥府」の世界には人間の意志を超える"何か"が存在していることが明らかであり、その"何か"とは＜暗黒意識＞である。この超越意志が裁判の判決を支配し、「冥府」の成り立ちを新参者に説明することを許さず、「冥府」の世界を研究することを禁止している。この＜暗黒意識＞の実体は、「冥府」の住民の一人一人に分散された＜無意識の悪意＞であり、これが裁判という形で世界律を規定している。 「未来都市」では＜超越意志＞と対立するという構図が成り立ち得るが、「冥府」では＜超越意志＞が住人の意識に分散して存在するため、それとの対決は深刻な自己矛盾を引き起こすことになり不可能である。（要旨）
5	フランス文学者福永武彦の冒険 ― 「マチネ・ポエティク」から「死の島」へ	山田兼士	日本文学　51-4　586巻 日本文学協会	2002/04	11	論考の主旨は、資料5-2に準じている。

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
6	『冥府』における記憶描写をめぐって —最初の記憶とボードレール	西岡亜紀	人間文化論叢　第6巻	2004/03	10	小説『幼年』(1964)で追究された「純粋記憶」のモティーフが、その10年前の「冥府」において、既に「純粋記憶」に通じるような描写、及びボードレールの「万物照応」の詩法の受容が見出せるのではないかという視点で考察している。 ・「冥府」におけるボードレールの影響：①タイトル　②作中人物の置かれている実存は、散文詩草稿（「世界の終り」(1958)のエピグラフに掲げている)の一節（以下)から摂取したような印象がある。 　忘れていた過ちによる死刑宣告。恐怖の感情。僕は告発に対して文句を言わない。夢の中の説明できない大きな過ち。 一つの記憶が見出される瞬間の意識の流れ、即ち追憶の契機の描写は、例えば『幼年』における「純粋記憶」に通じる。 ・「僕」の見る想起の契機となる物質と、想起に誘われる「僕」の精神との間に一つの「神秘的な混合の場」が形成されているという意味で、「万物照応」の詩法における「外界」と「内界」の照応の摂取が確認できる。また、そうした物質と精神の照応として見出されていく記憶は、「僕」の現在と過去との間で照応し、そのいずれにも属さないある種の特権的な時間となっており、記憶自体が一つの照応として表現されているといえまいか。（要旨）
7	「冥府」について	渡邊啓史	福永武彦研究会　第86回例会	2004/11	27	・「冥府」の設定は、ボードレールの心象風景としての「冥府」を踏まえ、作者のボードレールへの強い共感を示すと共に、この作品の眼目の一つが、ボードレールの主題の、小説としての定着にあることを窺わせる。その基調を支配するのは、詩人が繰り返し歌った倦怠と希望であり、過去への嫌悪であり、また尽きることのない後悔の感情である。 ・「教授」は「不思議な国のアリス」の兎を連想させるが、「冥府」における「裁判」の役割から考えて、導入部の『不思議の国』への周到な示唆は単なる思い付きの趣向ではないだろう。作者自ら「カフカやサルトルを下敷に使った覚えはまったくない」と語る通り、「冥府」の背景をなすのは、カフカやサルトルの不条理ではなく、キャロルの「無意味」論理の転倒)」あるいは矛盾である。 ・「嫉妬に駆られ恋女房を殺してしまう「職人」の話にはシェイクスピアの『オセロ』の連想があり、「踊子」の台詞には『マクベス』の独白の連想がある。また、「踊子」の造型は、フランス演劇『オンディーヌ』のヒロインの反映がある。こうした演劇的要素は、この小説が自死した友人の劇作家、加藤道夫へのレクイエムでもあった可能性を窺わせる。 ・「踊子」は、福永が愛読した、堀辰雄の短篇「曠野」、芥川龍之介の短篇「六の宮の姫君」に現れる、＜待つ女＞（愛した男の帰りをひたすら待ち続ける女)を連想させる。 ・「友達」の内面で対立して葛藤を引き起こす「死の誘惑」と「生への願望」は、作者自身を「捉えて離さなかった」ものであった。「冥府」の中心的主題は、「死の誘惑」と「生への願望」との間に引き裂かれた人間の矛盾と葛藤であると考えられる。 ・「作者自ら「人間を内面から動かしている眼に見えない悪意のようなもの」と説明する「暗黒意識」は、恐らく「死の観念の二面性（死の恐怖と誘惑)に由来する、分裂と葛藤の感情の一つに表現に他ならない。 ・「新生の宣告を待ちながら「過去への悔恨」と「待つことの不安や恐怖」とに苛まれる「冥府」での生活が、療養所における生活の抽象的、幻想的な表現であることは明らかであろう。（要旨）
8	「冥府」の系譜 —福永武彦「冥府」論	西田一豊	日本近代文学と性	2007/03	11	・「冥府」は、福永のソネット「夜」の詩情と「死と転生」の「死」と過去への悔恨というテーマが融合し、そこに「精神病理学」の影響が加わることによって成立したと考えられる。 ・「踊子」が性的であると同時に「プラトニック」であるという特徴を持つことを考察し、その後その特徴の前者が薄れ、後者がクローズアップされることで、『死の島』の相見綾子へと繋がっている。こうした「プラトニック」な側面が重視されることになる女性達が、福永のテクストでは彼岸の「母親」達に次第に近づいていく。それゆえに「冥府」は、福永のテクスト群で「古里」の問題系の端緒として位置づけられる小説であると思われる。（要旨）
9	福永武彦「冥府」論 —不条理演劇という方法の試み—	稲垣裕子	阪大近代文学研究 9	2011/03	21	昭和30年前後の福永は、不条理演劇という新たな文学方法に関心を示し学んでいた。「冥府」は、その成果を小説という形において、実践した作品の一つであるとし、サルトルの戯曲「出口なし」を主に、ベケットの戯曲「ゴドーを待ちながら」、及びナタリー・サロートの小説「見知らぬ男の肖像」との比較を行い、「冥府」に示された独自の観念について検討を加えている。 あえて福永は、死後の世界である冥府を舞台とし、もはや何者でもない人間存在の追及と、言明された主体の揺らぎを描いた。そこには「冥府」という世界の絶対的な法則に取り込まれてしまった人間の、その一生を必然として捉えることの違和と否定が示唆されている。つまり「冥府」という作品は、ついに他者によってしか承認され得ない不条理な人間存在を描く手段として、実験的な「方法小説」を目指したものといえる。そのように考えたとき、「冥府」という作品は、既成の方法を扱い続ける小説に対する抗いであり、その概念を崩すために「暗黒意識」という思索を表現した、積極的な観念小説であった。（要旨）